

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 157号

平成27年5月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「小西芳之助金曜会・同志会日誌語録」より (6)

モーセ、キリスト、パウロの共通点

キリスト教では偉い人としてはモーセ、キリスト、パウロだと思うが、この3人の共通点があると思う。パウロが回心してから3年アラビアへ行ってエルサレムへ行き、14年間タルソに行き又バルナバと一緒にエルサレムに行っていた。この17年間何をしてたか分からない。イエスは13～30歳頃まで大工をしていたらしいがそれも分からない。モーセも40～80歳まで40年間羊飼(いやしい職)をしていた。3人とも20年以上社会から捨てられたような者のようなことをしていられた。だから何もちやほやした仕事をする必要はない。分相応の仕事をして20～30年すれば必ず何か確立する。

世でちやほやされることは人類の貢献だとは60歳を越えてみれば思えない。パウロの伝記を見ればよく分かる。内会員、若い人

に特に言いたい。人生の真理は我々の心構えでもってどこでも学
ぶ。30年会長が病床にあられたが、その間に人間としての御修養が
出来たものと思う。内会員へのはなむけとして一言。

(昭和 34 年 11 月 13 日 金曜日 創立 57 周年記念祭)

君らも毎日を一生懸命やれ

今日は1960年の最初の金曜会である。今朝論語の対話で思った。たしか孔子の言葉であったが、「これを知る者これを好む者に如かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず。」「我々の人生の意義を知ることが好きである。またこれを楽しむようになる。」ということがこの言葉。人生を楽しむためには、どうしても神に対する信仰が必要であると思う。このことを同志会の2年間で充分訓練しておいて、社会に出てからたとえ信仰の熱い人だと人から見られなくとも自分の中で人生を楽しむようになってほしい。張りのある人生を送ってもらいたい、信仰がそれに非常に役に立つのではないかと思う。若い時は大きな仕事をするとか、多くの人に感化を与えるということが大きな魅力であるが、年を取ると張りのある人生を楽しむということが一番の魅力である。

私は今日教文館で江原万里さんの感想を見た。その感想では、江原さんは鈴木馬左也さん（住友財閥の総理事）にひかれて住友へ入ったということだが、その鈴木さんは大きな仕事をしながらも非常に誠実であったそうだ。会長先生も同じことだ。どうか諸君、同志会で誠実な精神を養ってもらいたい。それぞれの人に勤めがある。その

勤めに応じて与えられたことを誠実にやるということが大切だ。目の前の仕事を一生懸命やるということが一番大事なことだ！

来年内村先生の生誕 100 年祭がある。私が内村先生から学生時代にロマ書の講義を聞いてから 40 年になる。私の教会でも来年からロマ書の講義を始める。この頃は毎日 30 分 5 年間英語を続けているので、Commentary が少し読みやすくなった。私も負けないで与えられたことをやる。だから諸君！ 君らも毎日を一生懸命やれ。毎日馬力をかけてやれ。老人のように怠けていてはだめだ。

(昭和 35 年 1 月 22 日 金曜会)

一日は一生であり、空費してはならぬ

Big and small. 英文感想。I love big and small. 偉大は神の証明ではない。小さいことにおいても大きいことにおいても同様神の力を証明しうる。小さいことによって神の力を証明したい。大きいことに目をとられるが、微細なこともやった方が真理を知りうるのだろう。会社でも大きな役はやりやすい。モーゼ、イエス、パウロもある年まで何をやったか分からん。君らも会社でつまらん役があたる。しかし small things を忠実にやれ。そうやることが諸君の将来を決める。

一日は一生でありこれを空費してはならぬ。朝の心で一日は決まる。こうして一生を終る（内村：『一日一生』より）。朝と夜 3 seasons でいいから祈れ。これを続けてやると本当のことが分かる。なさずして論じても無駄だ。

（昭和 35 年 2 月 5 日 金曜日）

聖書は身体、生活で読め

東大の人間は顔色が悪い。学問が出来ただけではいかん。よく寝るように。寝る時間は勉強する時間である。同志会にいる間に聖書の真理を学んで欲しい。人生の基礎になる。これは英語を勉強するのと同じ。英語は謙虚に学ばねばならぬように真理は謙虚に学ばねばならん。聖書を読むのは目で読むのではない。身体で読むのである。ホームランを打つのは腰で打つと川上哲治が言っている。聖書は身体、生活で読まなきゃいかん。聖書は実際の経験で書かれている。そこまで我々の経験が行かなければわかるものではない。ホームランをかつとばす人間は同志会以外から出るところはない。私は確信している。

(昭和 35 年 4 月 23 日 金曜会 署名式)

使徒行伝の真髄：我らは復活の証人なり

私も最近使徒行伝を教会で説教しているが、いよいよ 19 章に入り、大詰めに近づいてきた。使徒行伝は新約の真ん中に置かれてあり、これは僕が思うに新約の重点 (point) といつか climax といつか、とにかく新約の中心、真髄が使徒行伝に置かれていることを意味するのではないかと思う。使徒行伝が分からねば福音は分からんと思う。ロマ書以下の Paul の手紙は使徒行伝の説明であり、commentary をなしているものと私は解釈する。そして使徒行伝の神髄とは何か？それは“我らは復活の証人なり”という点にあると思う。使徒行伝が新約中に占める地位は重大である。又 volume も新約中では最も多い。

使徒行伝の粹は“我らは復活の証人なり”ということであり、キリスト教の中心は復活である。復活を分からずしてはキリスト教は分からん。内村先生は 50 余歳を過ぎてから娘さんを失われて始めて復活の意味が分かれてその伝道に乗り出されたのである。

今日は新人諸君に“復活”の意義を説明したい。Luke 伝の復活の描写はすごいと思う。Luke 伝に依れば復活の最初の証人は 2 人の天使であって、女達に“生前のキリスト・イエスの言葉を思い起せ”

と天使が暗示を与えた時、女達はキリストの言葉即ち“我は3日目によみがえらん”との言葉を思い出したのであって、この女達は正にキリスト・イエスの言葉によってその復活を信じたのである。これによっても聖書の言葉、Christ の言葉を信じる深い意味が分かると思う。Paul のあの堅忍不拔の精神は復活と関係がある。あの精神を諸君は把みとらんといかん。あの堅忍不拔の精神がなくては Paul の如き大業はできぬ。

それからもう一つ。“接吻”という言葉の内村先生から始めて教えて頂いた。当時はこの頃のように kiss (küssen) という言葉は純真な学生は知らなかったが、内村先生の聖書講義の際に先生が両手を高くかざして“私は Paul 先生に心から接吻する”と叫ばれたが、諸君も接吻するくらいの尊敬を持ち得る先生を持たねばならん。先生の言葉を聴く時には尊敬をもって聴かねば言葉の真の意味は分からん。誠実には誠実をもってはじめて答えられるのである。キリストの福音に対する態度も同じであって、他人に福音を説く時にも人を見て説かねばならない。人を選ばずに福音を説くのは間違いである。

(昭和 35 年 5 月 6 日 金曜日)

実行してほしいこと二つ

聖書を読んだ感想を述べる。どんなつらい時でも実行してほしいこと二つ。

1 ヨハネ伝にあるイエスを見上げること。どうにもならない時十字架上のイエスを見上げるときっと救われる。(ヨハネ伝3章“荒野で蛇を見上げる”)

2 主イエスキリストの名を呼ぶこと(ロマ書10章)。主の名を呼ぶ者は救われる。心の乱れた時することができ信仰に直結している。この誰にでも出来ることこそ大切なのである。

誰にでも出来ることをやってほしい。

(昭和35年7月1日 金曜会)

準備期間

使徒行伝の最後を勉強している。ペリスクは判決をぐずついで〔パウロは〕2年牢に入れられていた。そして次の総督に変わったことで終わっている。その年代は学者間でも深く問題とされ、56～60A. D. 私の尊敬するラムゼー先生は57A. D. これからパウロの生涯を探ることが出来る。35～6歳で転換して、46歳までが沈黙の時代。大体50歳位で第1回伝道旅行。神はそれまで準備しておられた。62～3歳で死んだので、3分の2以上準備期間。モーセもほぼ同様である。

我々若い時を無為に過ごした者には大きな encouragement である。諸君も決してあせらぬように。日本はこの傾向が強すぎる。ゆっくりじっくり準備の勉強をするように。私は50歳で伝道者になったことがパウロと同じであることにいい気になっているのではない。これから準備を10年行い、70歳になったら僕の説教に耳を傾けて欲しい。

(昭和35年9月30日 金曜会)